

6 月第 3 週の礼拝説教

- 日 時：2024 年 6 月 16 日（日）10：30～11：30 聖霊降臨節第 5 主日礼拝
- 説 教： 保科けい子牧師
- 聖 書：新約：ヨハネによる福音書 4 章 5 節～26 節（新約 p169～170）
- 説教題：「 神を礼拝する者は 」
- 讃美歌：25 「 父・子・聖霊に み栄えあれ。」
521 「 とらえたまえ、われらを。」

先程司式者にお読みいただいた聖書箇所をお聞きになっていて、最近聞いたばかりの箇所ではないかと思われた方もいることでしょうか。実は、5 月 12 日の主日礼拝で、ヨハネによる福音書 7 章 32 節から 39 節を取り上げました時に、本日の箇所との比較をしているのです。7 章 37 節で主イエスは「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」とお語りになりました。その御言葉と非常に似ているのが、本日の聖書箇所の 4 章 13 節,14 節で語られている御言葉です。シカルというサマリアの町の井戸のそばで、主イエスが一人のサマリアの女に語られたのは、「この水を飲む者はだれでもまた渴く。14 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」という御言葉でした。本日の聖書箇所では一人のサマリアの女に語っているのですが、7 章の 37 節,38 節では、仮庵祭という大勢の人々が集まっているエルサレム神殿の境内で群衆に向かって大声で語られているという違いがあります。そして、主イエスから与えていただいた「水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」状態だったものが、「その人の内から『生きた水が川となって流れ出るようになる。』」というように大きく発展しているのです。ヨハネによる福音書全体を読むと、その発展の過程において、主イエスの十字架と復活の出来事が関わってくるが見えてきます。その時に、「主イエスが与えて下さる生きた水によって渴きを癒され、周囲の人々をもその水によって潤していくことができるようになるのは聖霊を受けることによってです。主イエスが与えて下さる生きた水とは聖霊のことである、ということもできるのです。」と申し上げて、ヨハネによる福音書の語っている聖霊降臨の出来事についてお話したと思います。

ところで、私は 2022 年 4 月から立川教会にまいりましたが、その年の立川教会の年度教会主題聖句を決めるにあたって、本日の週報の表面にもありますが、ヨハネによる福音書 4 章 24 節の「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」を選びせていただきました。そして、聖霊降臨日の礼拝を翌

週に控える5月29日の主日礼拝で、ヨハネによる福音書4章1節から15節を取り上げて、「永遠の命に至る水」という題で説教したことを覚えています。それは、私たちの教会生活の中心は主日礼拝であり、私たち礼拝する者一人一人が主なる神様のお招きを受けて、霊と真理をもって礼拝するところにこそ「生きた水が川となって流れ出るようになる」という本当の喜びが実現するというを最初に申し上げたと思います。その上で、その喜びの中心にある「主イエスはメシアに違いない」との確信を伝えるために、サマリアの女が町に出ていったという同じ出来事が私たちにも起こるということを、ご一緒に経験していきたいと願ったからです。そして、本年度2024年も立川教会では同じ聖句を掲げています。なぜならば繰り返しになるのですが、主イエスが私たち一人ひとりの日常生活の中の井戸のそばに座って私たちを待っておられ、そこで私たちを呼びかけ招かれているので、私たちは誰でも主の呼びかけのみ声にお応えして礼拝に集ってくるということをご一緒に実感していきたいからです。そこから、私たちの新しい一週間が始まっていくのです。

では、聖書の順を追って本日の箇所を見てまいりましょう。ヨハネによる福音書の4章は、1節から42節までが一続きの話です。本日の箇所は、ユダヤ地方におられた主イエスがガリラヤにお帰りになろうとされた途中で、サマリアで起こった出来事として描かれています。サマリアは紀元前722年にアッシリアという国によって滅ぼされてしまった北イスラエルという国の中心の町でした。一部の人はアッシリアに捕囚となり、残された多くの民は周辺の国々から侵略されて、民族同士のみで結婚し家庭を作るという長い間の慣習が破られてしまい、様々な民族との婚姻関係が生じてしまったのです。ですから、ユダヤ民族こそ主なる神がお選びになった唯一の民であると固く考え、旧約聖書の律法を遵守するユダヤ人達からは蔑まれていたという背景があるのです。そういうわけで、一般にエルサレムからガリラヤへ行く場合には、多少回り道でもサマリアを通らない道を使っていたと言われていました。しかし、主イエスはあえて本日の箇所の直前の4節で「しかし、サマリアを通らねばならなかった。」と聖書が記すような行動をなされたのです。エルサレムからおよそ数十キロ離れたシカルというサマリアの町まで来られた主イエスは、旅に疲れてヤコブの井戸のそばに座っておられたと描き、共にいるはずの弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた、と丁寧にかつ具体的にその場の状況が説明されています。

さて、時は「正午ごろ」のことでした。「サマリアの女が水をくみに来た。」のです。サマリアは、地理的には乾燥した砂漠のような風景を想像していただければよいと思いますが、井戸はところどころにしかなく、近隣の人たちが仲間ですべて使っていたと思われま。また、イスラエルという国は昼間は炎天下でとても暑いので、人々はおそらく家の中で涼んでいたと思われま。そのような時に水を汲みにくるとするのは、女が自

ら誰にもあまり会いたくないと思っていたか、あるいは、人々から疎んじられていたの
でそのような時にしか水を汲めなかったということになります。いずれにせよ、本日の
聖書箇所(ヨハネ)の16節から19節での主イエスと女との会話を読んでもわかりますように、いわ
ゆる「わけあり」の人だったのです。その女に主イエスは「水を飲ませてください」と
言われました。何気なく書かれていますが、このことはそのサマリアの女にとってはと
ても大きな驚きの出来事でした。なぜなら、サマリア人を嫌っているはずのユダヤ人か
ら、しかも、一般には初対面の女の人に話しかけないはずの男の人から、親しく頼みご
とをされたからです。ですから、9節で「すると、サマリアの女は、『ユダヤ人のあな
たがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか』と言っ
た。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。」と詳しく説明されているので
す。ここでは、神である主イエスとサマリアの女との出会いが主イエスのほうからの働
きかけによって起ころうとしている、と読むこともできると思います。それはちょうど、
主イエスが私たち一人ひとりに、日常生活の中で呼びかけて下さりお招き下さっている
ということと重なっているのではないのでしょうか。11節から12節の段階ではまだ、女は
日常的な営みである井戸から水を汲む手段や旧約聖書以来の言い伝えということに縛ら
れて、主イエスのほうに向きを変えることができていません。だからこそ主イエスは、
「この水を飲む者はだれでもまた渴く。」と語られているのです。けれども注意したい
のは、主イエスに対する呼びかけの言葉が、15節に記されているように、「主よ」と変化
していることです。このサマリアの女は、自分自身の後ろめたい日常生活と満たされな
い魂の渴きを隠しながら日々を過ごしていたと思います。しかし、主イエスの力がいつ
の間にか女を主イエスのほうに大きく方向転換させているということが分かります。そ
してこの出来事を読むと、私たちは自分が本当に渴いているということを知っているだ
ろうか、魂の根源にある渴きが本当に癒されるのは一体どこなのか、ということを考え
させられます。主イエスが誘われるのは、「わたしが与える水を飲む者は決して渴かな
い。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」と語
られる場です。それこそが、主の日ごとにささげられるこの私たちの礼拝なのです。そ
こにこそ、23節から24節に記されている「霊と真理をもってするまことの礼拝」の到来
ということが生じているからです。そして、そのようなまことの礼拝においてこそ、26
節に記されるような「それは、あなたと話をしているこのわたしである」という主イエ
スの言葉が聞こえてくるのです。ここでの元の言葉は、まことの主なる神が顕現なさ
る時にご自分の名を語る「エゴエイミ」という言葉が用いられています。まことの礼拝、
それはいつでもそこに顕現なさる主イエスとの出会いが起こります。それは同時に顕現
なさる主なる神との出会いでもあります。そして、私たち一人ひとり主イエスから与
えられた水を飲み、私たちの内に泉が与えられ、永遠の命に至る水がわき出る者として、
これまでとは全く異なる新しい者へと変えられていくのです。